

## Golden Apple への道程

—“A Solemn thing within the Soul” を中心に—

岩 田 典 子

A Solemn thing within the Soul  
 To feel itself get ripe -  
 And golden hang - while farther up -  
 The Maker's Ladders stop -  
 And in the Orchard far below -  
 You hear a Being - drop -

A Wonderful - to feel the Sun  
 Still toiling at the Cheek  
 You thought was finished -  
 Cool of eye, and critical of Work -  
 He shifts the stem - a little -  
 To give your Core - a look -

But solemnest - to know  
 Your chance in Harvest moves  
 A little nearer - Every Sun  
 The Single - to some lives.

アメリカ、ニューイングランド地方によく見られる果樹園の林檎の取り入れ時の光景をもとに書かれた上記の詩は、エミリー・ディキンソン（1830—86）が清書原稿を束にして残した小冊子、ファシクル<sup>1)</sup>の22番目に納められた23篇のうちの1篇で、ディキンソンが最も多作であった1862年、31歳のときの作品である。

しかしディキンソンの定本である1955年出版のジョンソン版<sup>2)</sup>にあるこの詩、483番が初めて公になったのは、ディキンソンの死後、第一詩集を編纂した Mabel Loomis Todd が娘の Millicent Todd Bingham と一緒に668篇の詩を掲載して、1945年に編纂した *Bolts of Melody: New Poems of Emily Dickinson* の part one<sup>3)</sup>、 “That Campaign Inscrutable” というタイトルの章であり、次のように載った。

A solemn thing within the soul

To feel itself get ripe  
 And golden hang, while farther up  
 The Maker's ladders stop,  
 And in the orchard far below  
 You hear a being drop ;

A wonderful, to feel the sun  
 Still toiling at the cheek  
 You thought was finished ; cool of eye,  
 And critical of work,  
 He shifts the stem, a little  
 To give your core a look ;

But solemnest to know  
 Your chance in harvest moves  
 A little nearer ; every sun  
 The single, to some lives.

なんと厳肅なこと，心のなかで  
 黄金色に熟して  
 垂れさがるのを感じるのは  
 前の方に創造主の梯子が止まる，  
 遙か後ろの方で  
 存在が一つ落ちるのが聞こえる

なんと素晴らしいこと  
 もう熟しくしていると思っていたのに  
 太陽がまだ頬を照りつけている  
 仕事に厳しくて真剣な目つき，  
 主が果柄を少しひねって  
 熟れ具合を見てくださる

しかし何より厳肅なのは  
 収穫のときが  
 少しずつ近づいているのを知ること，  
 毎日，太陽がそれぞれ人生に訪れる。

これは Todd 夫人の作った原稿にもとづいて書かれたもので，生前，ディキンソンの10篇の詩

が活字になったときと同じように、「果樹園主」であると同時に、大文字になれば「創造主、神」を意味する“Maker”を除いてはすべて小文字にしてあり、ダッシュはセミコロンのカンマへと常識的に置き換えられている。ディキンソンの生原稿では10行目の最初にある“cool of eye”が9行目の終わりに置かれている変更がしてある。

この詩集を読んで、2年後の1947年、Henry W. Wells は *Introduction to Emily Dickinson* で、「果実が実るという興味深いメタファーを使っており、self-education をテーマとしたディキンソンの詩群の一篇である。果樹園のオーナーとディキンソンが思っている神は、それぞれの果物の成長を注意深く観察し、果実が最も熟したときに摘み取ろうとしている。どんな悲劇的で大変な体験にも耐え、乗り越え、人間的成長に役立たせることができるとディキンソンは信じている。この視点から、ディキンソンは自分に起こったいろいろな事件の過程を心のなかにたどっていくが、何一つ失われるものはないと考えている。またいかなる場合にも、賢い人というのはどのような出来事もどうしても必要なものにしてしまう<sup>4)</sup>」と解釈している。

人は神の厳しい鑑識眼のある目にかなうように、自己の内面的成就を目指して日々努力していくなかで、「存在が一つ落ちるのが聞こえる」に象徴される失敗や、挫折があったかもしれない。しかしそのような経験を通して、自らが成熟していくのであり、その成長を自分でも感じる時がある。それはやがては神の目に留まるだろう。なんという神々しい厳粛なときだろう。そして正しい評価をしてもらえる、と自分では完璧と思っていたのだけれど、それは自己過信であったか。なおも太陽が自分を照らし、輝かせてくれている。

そんななか、神は冷静で厳しい目を利かせ、その手を触れ、じっと深奥に一瞥を投げかけてくださる。しかしなんととっても神に選ばれる時が近づいていることを自覚することは、一番厳粛な気持ちになるときである。どんな苦難にも耐え、たゆまぬ努力を積み重ねておれば、「毎日太陽がそれぞれの人生を照らしてくれる」。今までのどんな経験も無駄ではなかったのである。というように読めば、Wells の解釈は納得がいく。

この解釈の背景には、“Maker”や「果樹園」、「収穫」などの織りなす世界から、聖書が見えてくる。「果樹園」を信仰や、そこから人間形成を連想することはキリスト教文化圏では自然なことで、アメリカ最初の詩人、Anne Bradstreet (1612—72) も、「瞑想集」64章で、「教会は神様の果樹園」と言い、果物の木を信仰心の強い信者、挫折する信者、表面だけ信者の顔をしているクリスチャンなどに例えている<sup>5)</sup>。

ある研究者は“Maker's Ladders”に先端が天に達する梯子が地に向かって伸びており、神の御使いたちが上がったたり下がったりしていたという夢を見た創世記のヤコブの梯子を連想し、「主とまじわったこともなく、天国を知ることも許されないでいるヤコブの心からの祈り<sup>6)</sup>」と解釈している。また聖書の「種まきの譬え」、マタイによる福音書13章18節—23節、マルコによる福音書4章13節—20節、ルカによる福音書8章5節—15節なども思い起こす研究者<sup>7)</sup>がいるのも当然だろう。

「種まきが種をまきに出ていった。まいているうちに、ある種は道ばたに落ち、踏みつけられ、そして空の鳥に食べられてしまった。ほかの種は岩の上に落ち、はえはしたが水気がないので枯れてしまった。ほかの種は、いばらの間に落ちたので、いばらと一緒に茂ってきて、それをふさ

いでしまった。ところが、ほかの種はよい地に落ちたので、はえ育って百倍もの実を結んだ。(Luke 8, 5-8)「この譬えはこういう意味がある。種は神の言である。道ばたに落ちたのは、聞いたのち、信じることも救われることもないように、悪魔によってその心から御言が奪い取られる人たちのことである。岩の上に落ちたのは、御言を聞いたときには喜んで受け入れるが、根が無いので、しばらくは信じていても、試練のときが来ると、信仰を捨てるひとたちのことである。いばらのなかに落ちたのは、聞いてから日を過ごすうちに、生活の心づかいや富や快樂にふさがれて、実の熟するまでにならない人たちのことである。良い地に落ちたのは、御言を聞いたのち、これを正しい良い心でしっかりと守り、堪え忍んで実を結ぶに至る人たちのことである。(Luke 8, 11-15)」

このように読んでいくと、Anne Bradstreet の話や Wells の意見もごく自然に受け止められる。そこから「詩人として、ディキンソンが詩人としての自己のアイデンティをドラマ化した詩」と解釈した Judith Farr は「この詩は心を完璧なものにして永遠に迎え入れられるために、人の心に働く神の恩恵についての寓話として読めるかもしれない。太陽、つまり神、“Maker”の助手は——キリストであろうか——自分の仕事に真剣な冷静な目を持ち、林檎の茎の位置を変えることもできる者——によって、詩人の内的自我が調べられている。そして最終行 (Every Sun / The Single - to some lives) については、超越主義者、Ralf Waldo Emerson (1803—82)に通じるような、人生の意義の秘密は死後であれ、現世であれ、毎日毎日、個人的な成熟によって明らかになるという啓示であるかもしれない<sup>8)</sup>」と解釈している。

また Inder Nath Kher のように「太陽」を本人つまり、詩人「ディキンソン自身」のペルソナと解釈すると、太陽が毎日照り続けることは「詩人が日々、生き、努力していくなかで The Single, つまり自我における“unity, oneness”を目指す<sup>9)</sup>」こととなる。

しかし神と太陽の間において生かされている「存在」として、人間の日々の自己修練が完成されるであろうというのも、どこか楽天的であるように思える。また詩全体にみなぎる激しい緊張感に何か強い詩人の思いが詩の低流にあるように思えてならない。

魂にとって 畏ろしいのは  
 黄金色に熟して  
 垂れさがるのを感じる時  
 上の方で果樹園主の梯子が止まる  
 遙か下では  
 存在が一つ 落ちるのが聞こえる

仰天するのは  
 もう熟したと思っているのに  
 太陽がまだ頬を照りつけているのを感じる時  
 冷やかかで 仕事に厳しい目つき  
 主が果柄を 少しひねって

芯の熟れ具合 を見ること

しかし何より畏ろしいのは 収穫が

少しずつ近づいているのを知ること

毎日 ある命にとっては

太陽しか来ない

“solemn”と“wonderful”の意味をディキンソンが愛用したといわれるウェブスター英語辞典<sup>10)</sup>で見ると，“solemn”は“grave ; serious ; or affectedly grave ; as a solemn face”，“wonderful”は“adapted to excite wonder or admiration ; exciting surprise ; strange ; astonishing”とある。そうになると、絶対の力を持つ創造主に対して、「林檎」である人間は力はなく、ただ神の意志を恐れ戦き、待つのみという意味合いが強くなる。

自分より上のところで果樹園主の梯子が止まっている。“up”と“below”は上下だけでなく、列の前の方、詩のなかの話者よりも先の方にあると知っているのかもしれない。そこから質の上下も考えられよう。いずれにせよ、自分が選ばれ、摘み取られるのもうすぐだと期待をし、固唾を呑んで待っているとき、背後の方で熟しすぎずすぎて自ら落ちていく「林檎」の音が聞こえる。自分もそのような運命を辿るのか、晴れて選ばれる身となるのか、激しい緊張が走る。

「林檎」が待っているのは果樹園主なのに、ある「林檎」にとっては、もう不必要な太陽の光しか来ないのではないかという懷疑と恐怖。そう考えれば、どのような人生であろうと「全面的な諦め、神の意志に対する穏やかな服従<sup>11)</sup>」として生きることを余儀なくされている限りある生を生きるしかない人間が浮かび上がってくる。

また神に選ばれるということについても、当然、この世で神に選ばれるほどの人間とも解せるし、死後、選ばれて天国に入ることができるとも解釈できるだろう。十九世紀中葉、ディキンソンの存命中はそれほど神が、教会が君臨した時代であったという読みも可能となる。

しかしそれは一方的な敗北、惨敗の弁ではなく、自分の努力に対して正しい評価がなされていないのではないかという疑い、神に不満を、反発の一つも述べたいところだが、じっと堪えているように思える。“The Single - to some lives”とは神の天の邪鬼のさせる技ではないか。なんの悪気もなく、言葉もなく、一瞥で人を殺していくとはと眩く詩人の声が聞こえてくる。

以上のように最終行を「諦め」と解釈し、実った果実とそれを摘み取る剪定男、果樹園主という関係を、男と女というそれで読み返してみると、当時父権社会のなかでの自己を主張することもままならなかった女性の弱い立場が見えてくる。

三連三行の「毎日 ある命にとっては／太陽しか来ない“Every Sun／The Single - to some lives”」は、「毎日 陽が照って／ある命にとっては いつまでも独り」とも読めるだろうか。「太陽」は一般には果実の成長を助けるものと考えられているが、その強大な力は当然ながら殺す力にもなる ambiguous なものである。「林檎」にはそれを逃れることはできない。ただ待つのみか。いつまでも選ばれることなく自滅してしまうのか。結婚であれ、仕事であれ、男の価値観で女が選ばれることへの、疑問、怒りが渦巻く。

ディキンソンが自分の詩が当時の詩壇に認められるかどうか、批評家のトマス・ヒギンソンに

批評を乞うたとき、「私の期待が裏切られなければと思います——申すまでもないと思いますが——私の名誉が抵当にはいっているのをごぞいます<sup>12)</sup>(L-260)」と書き送ったのも、この詩の“golden apple”の緊迫した心境と重なる。この緊張のなかで、ディキンソンはひたすら自己の詩学を磨いた。

そして選ばれるのは一体いつなのか。改めて詩を読み直すと、三連には次のようにある。

But solemnest - to know  
Your chance in Harvest moves  
A little nearest - Every Sun  
The Single - to some lives.

一行目に“to know”とあるから、「何より荘厳なのは」将来、収穫される、選ばれることを自分が「知ること」、自覚することであって、自分が実際に収穫されるというのではない。必ず収穫されるはずという強い確信なら“I will be chosen”となろうし、そうでなければ、“I shall be chosen”ということになってくる。が、いずれにせよ、収穫の瞬間はこの詩のなかには書かれていない。

前者“I will be chosen”と考えると、三連は次のように読めるのではないだろうか。

しかし何より荘厳なのは  
取り入れのときが 毎日  
少しずつ近づいているのを知ること  
ある人々にとっては たった一日。

自己の成熟のときのために努力し励んできたが、人はこの世に生きている限り、世間、時代という限られた法廷の掟“The Single”で決まる。成果が認められ、選ばれる身になるかどうかの判断に成熟の過程は問われない。「たった一日“The Single day”」に象徴される出来上がった作品、「林檎」そのものが、「ある人々」、選定者、剪定者、詩壇の“Maker”としての、批評家、読者の対象となる。

しかし、詩人自身にとっては、他者の目より、最上級“solemnest”へとひたすら自己の詩の完成に向けて「毎日／少しずつ近づいている」という日々の営み、詩作に関心が向けられている。「毎日“Every Sun”」、詩を書くことの喜び、新しい詩の創作への悪戦苦闘の日々などその詩作過程が詩人にとって生きているかけがえのない時間である。そうしたなかで、自ら「取り入れのときが来るのを知る」。詩人の詩学こそが自己の作品の剪定主、“Maker”であるはずだから、詩壇の“Maker”の判断を待つ必要もない。「取り入れのとき」をディキンソン自らが詩に書き記すことは決して訪れなかったが、本物を認めてもらえない悲哀を漂わせて、だが毅然とディキンソンは胸を反らす。選ばれない負こそ光栄ではないか。「何より厳荘なのは／取り入れのときが 毎日／少しずつ近づいているのを知ること」。それが詩人ディキンソンの詩作の原動力となって彼女を書かし続けたといえよう。

「林檎」が最終連で“I will be chosen”ではなく、“I shall be chosen”と「知る“to know”」ならどうなるだろうか。

なんと荘厳なこと 心のなかで  
 黄金色に熟して  
 垂れさがるのを感じるのは  
 天上で創造主の梯子が止まる  
 と 地上では  
 存在が一つ 落ちるのが聞こえる

なんと素晴らしいこと  
 もう熟したと思っていたのに  
 太陽はまだ頬を照りつけている  
 主は仕事に厳しい真剣な目つきで  
 果柄を少し持ちあげ  
 熟れ具合を見る

しかし何より荘厳なのは  
 取り入れのときが 少しずつ  
 近づいているのを知ること  
 毎日 太陽がそれぞれの命に訪れるたびに

太陽の燦々と輝く果樹園，命の絶頂期。詩語“golden”は詩の全行にわたって強烈な輝きを放って鮮烈である。成熟の極のとき訪れるものは収穫，死である。ひとたび種から命の芽を出したものは，ひたすら成熟に向かって行くことを余儀なくされている。「もう熟したと思っていたのに／太陽はまだ頬を照りつけている」。絶え間ぬ歩みで芯まで熟して見事な黄金の実を付けた完熟のとき，「天上で創造主の梯子が止まる」。創造主は同時に死神である。そして手を触れ，「仕事に厳しい真剣な」死神の目が凝視したとき，「地上では／存在が一つ 落ちるのが聞こえる」。

もう熟した人生を十分に生きてきたのだからと，死神が足を止め，低い声で言う。命の刈り取りの命令は，絶体絶命である。しかし人はそれに悲しみ，涙することはない。成熟の真っ直中，太陽の輝く白昼に，黄金に輝く命の見事な死，刈り入れ，収穫のときが来たのである。人は皆，限りある命（mortality）を死によって，不滅の生（immortality）へと再生の道を辿る。ディキンソンの死生観である。

#### 注

- 1) R. W. Franklin, ed., *The Manuscript Books of Emily Dickinson* 2 vols. (Cambridge, Mass., The Belknap Press of Harvard University Press, 1981).
- 2) Thomas H. Johnson, ed., *The Poetry of Emily Dickinson*, 3 vols. (Cambridge, Mass., The Belknap Press of Harvard University Press, 1955). 以後（P— ）と整理番号を記す。

- 3) Mabel Loomis Todd and Millicent Todd Bingham, ed., *Bolts of Melody: New Poems of Emily Dickinson* (New York: Harper & Brothers Publishers, 1945).
- 4) Henry W. Wells, *Introduction to Emily Dickinson* (Chicago: Packard and Company, 1947), p. 109.
- 5) 吉津成久『アメリカ詩の原点』学書房, 1977年, p. 85.
- 6) Cynthia G. Wolf, *Emily Dickinson* (New York: Alfred A. Knopf, 1986), p. 305.
- 7) Judith Farr, *The Passion of Emily Dickinson* (Cambridge, Mass., Harvard University Press, 1992), p. 62. Beth Maclay Doriani, *Emily Dickinson: Daughter of Prophecy*, (Amherst: The University of Massachusetts Press, 1996), p. 116.
- 8) Judith Farr, *The Passion of Emily Dickinson* (Cambridge, Mass., Harvard University Press, 1992), pp. 62-63.
- 9) Inder Nath Kher, *The Landscape of Absence: Emily Dickinson's Poetry* (New Haven: Yale University Press, 1974), p. 252.
- 10) *An American Dictionary of The English Language* by Noah Webster (the first edition, 1828)
- 11) John B. Picard, *Emily Dickinson: An Introduction and Interpretation* (New York: Barnes and Noble, 1967), p. 116.
- 12) Thomas H. Johnson and Theodora Ward, eds., *The Letters of Emily Dickinson*, 3 vols. (Cambridge, Mass., The Belknap Press of Harvard University Press, 1958)。(L— )と整理番号を記す。